

御勅使川扇状地北部の集落展開について

— 大塚遺跡・石橋北屋敷遺跡を中心に —

依 田 幸 浩

-
- | | |
|-----------------|-------------------|
| 1. はじめに | 4. 御勅使川扇状地北部の集落展開 |
| 2. 大塚遺跡の集落構成 | 5. おわりに |
| 3. 石橋北屋敷遺跡の集落構成 | |
-

1 はじめに

中巨摩郡白根町駒場付近を扇頂部とする御勅使川扇状地は、八田村、白根町、櫛形町、若草町、甲西町にまたがる大扇状地である。白根町、八田村は御勅使川の氾濫の影響を最も激しく受けた地域であり、砂礫層の堆積がおびただしく、分布調査等においても遺物の採集が困難であるため、遺跡が少ない地域とされてきた。しかし、近年の分布調査・試掘調査によっていくつかの遺跡が発見され、発掘調査が行われた結果、この地域における遺跡の立地状況が徐々に明らかになってきている（第1図）。

白根町内では、平成11年度から12年度にかけて、弥生時代初頭の土器・石器が出土した横堀遺跡（平成11年度調査）¹⁾、平安時代を中心とする巨大な集落跡が発見された百々遺跡（平成11年度・12年度調査）²⁾の発掘調査が行われた³⁾。

八田村内では、平成7年度に工業団地造成に伴い大塚遺跡の発掘調査が行われ、古墳～奈良・平安時代の住居跡などが発見された⁴⁾。中部横断道及び甲西バイパス関連の発掘調査については、平成9年度から10年度にかけての石橋北屋敷遺跡⁵⁾に始まり、平成10年度には壺番下堤跡⁶⁾、平成11年度には中世の水田跡が発見された仲田遺跡⁷⁾、奈良三彩が出土した立石下遺跡⁸⁾と次々に発掘調査が行われてきた。

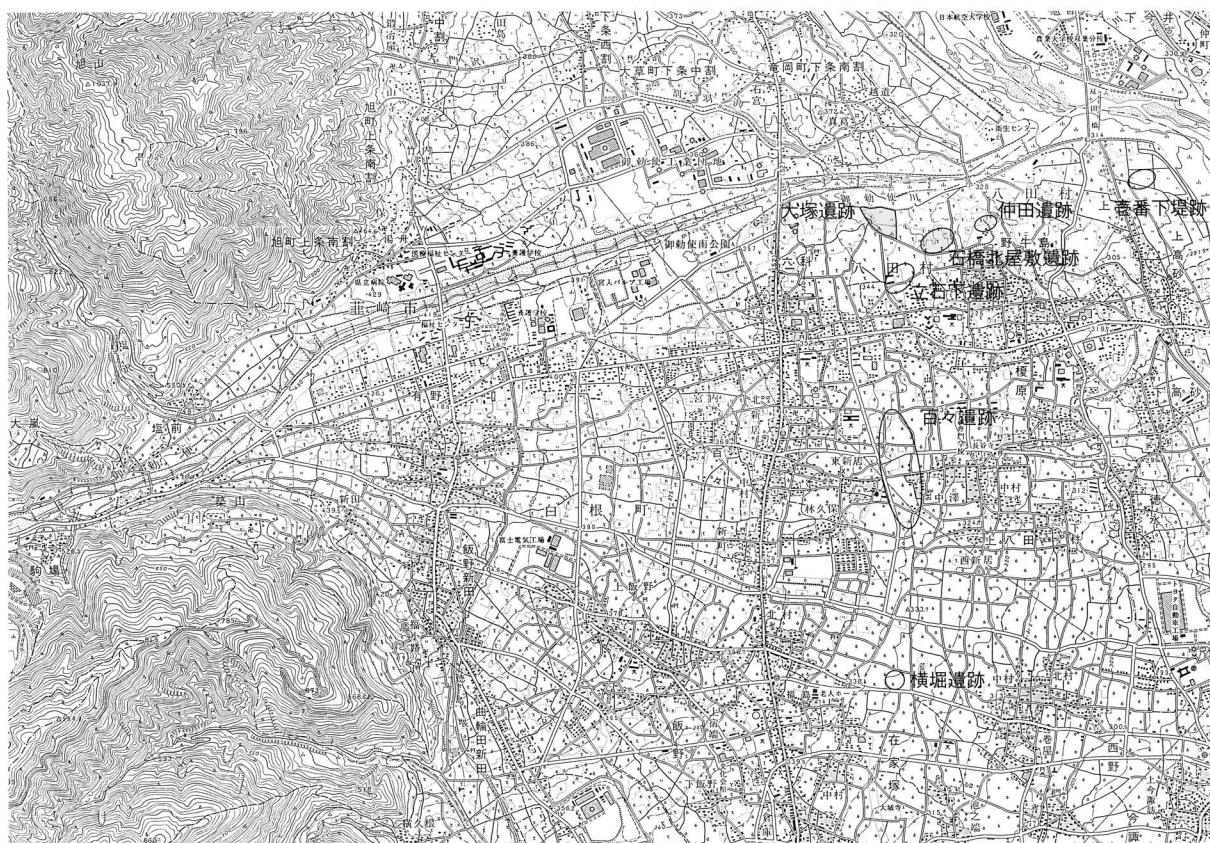
今後、報告書の刊行が進み、今までの空白地帯を埋める数々の成果が明らかになっていくと思われる。ここでは、その報告書の刊行に先立ち、大塚遺跡と石橋北屋敷遺跡を中心に、御勅使川扇状地北部（白根町、八田村）における古代から中世にかけての集落の展開について若干の考察を試みたい。

2 大塚遺跡の集落構成⁹⁾

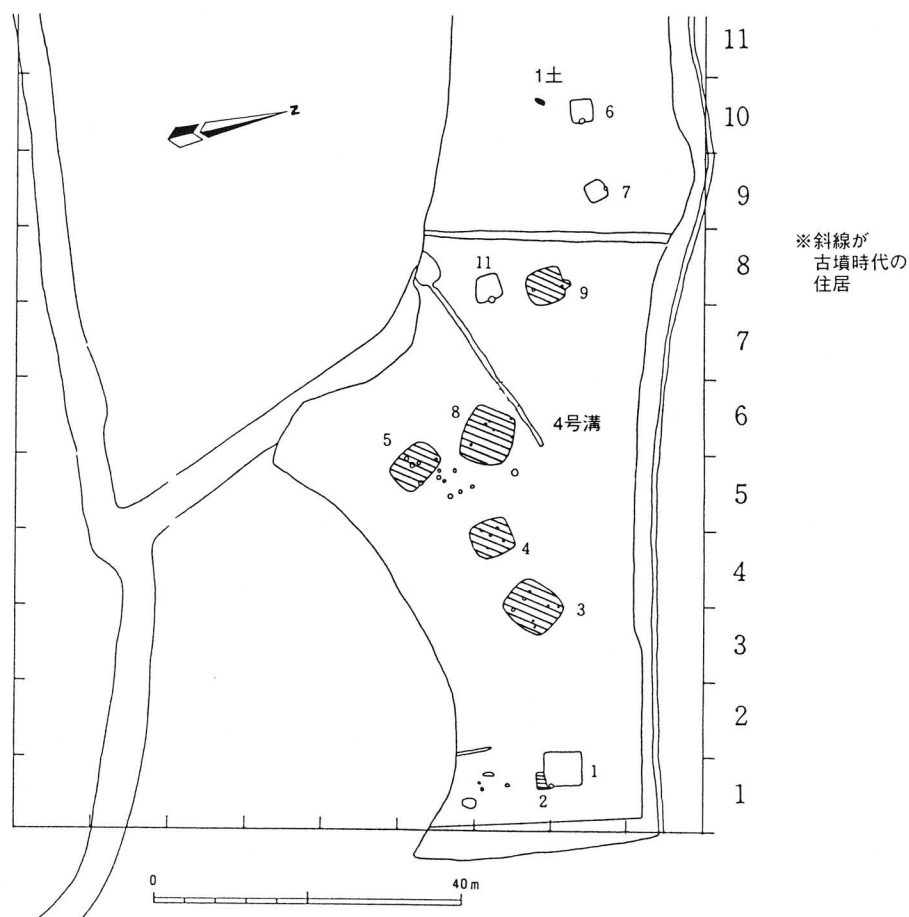
大塚遺跡は御勅使川扇状地の扇央部より下流域に形成された東向きに傾斜する尾根状の微高地上に立地する。標高は330～335mを測る。平成7年度に約19,000m²の本調査が実施され、古墳時代前期・奈良～平安時代の住居跡、溝などが発見された。遺跡の中央部には浅い谷が走っており、この谷を境として調査区がA区とB区に分けられている。

古墳時代前期の住居跡は6軒確認されており（第2図）、S字状口縁台付甕分類での古い段階を主体としている。すべての住居跡がA区の北東に集中しており、調査区外北側へ多少の広がりが見られるものの、小規模集落であったことが窺える。古墳時代の住居跡は当該期に限定されており、時期的にも限られた集落である。

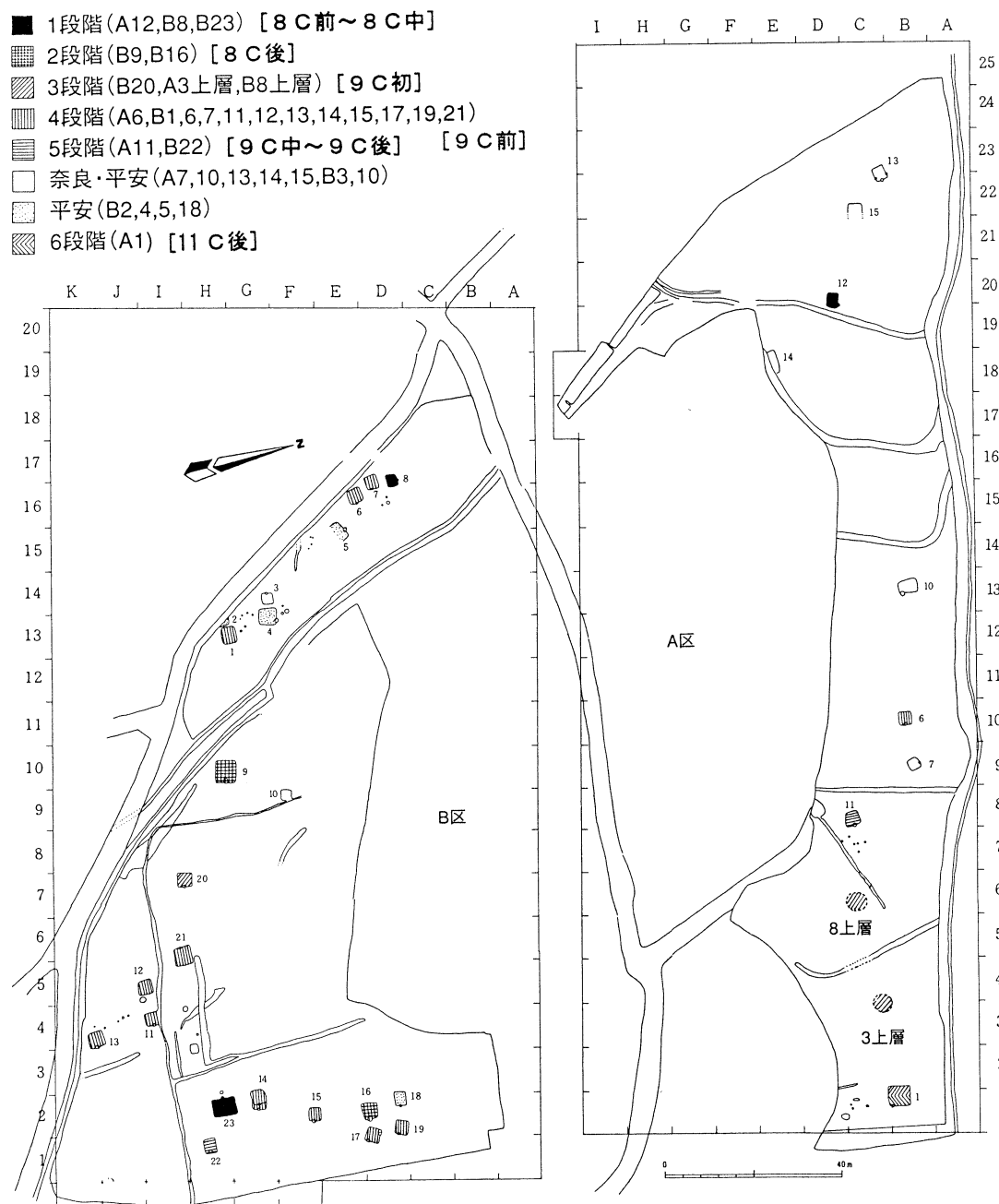
奈良～平安時代の住居跡は33軒確認されている（第3図）。これらの住居跡は既に報告書の中で6段階に分類され、それぞれに実年代が与えられている。このうち、21軒が8世紀中頃～9世紀末のなかに存在し、1軒は11世紀末～12世紀初頭に位置づけられる。8世紀中頃～9世紀末の間にほとんどの住居跡が集中しており、この期間が大塚遺跡における集落の最も発達した時期とみられる。住居は中央部の浅い谷を中心に展開している。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 大塚遺跡古墳時代の住居群 (1/1,000) (新津1997)



第3図 大塚遺跡奈良・平安時代の住居群 (1/1,600) (新津1997に加筆)

このことは、住居数の最も多い9世紀前半の住居群の配置において顕著であるが、その他の時期の住居にも当てはまる現象といえる。

また、大塚遺跡では水路と区画溝が発見されている。水路は中央の浅い谷から南北両側へ水を引くために延びるもので、この谷が水の供給源として機能していたことを窺わせる。時期は、古墳～平安時代と江戸時代に分けられる。区画溝は土地を区画する目的で掘られたと思われる溝で、B区の中央から東側にかけて確認されている。規模は、幅0.4m～1.8m、深さ30cm～40cmである。幅の数値にかなりの開きがあるが、上部が削平されている部分もあるため、本来は0.8m～1.8m程の幅になるものとみられる。時期については、9世紀前半の住居を切っていることからこれよりも新しいことがわかるが、出土遺物に乏しく詳細な時期は不明である。

3 石橋北屋敷遺跡の集落構成¹⁰⁾

石橋北屋敷遺跡は大塚遺跡から東へ約300mの地点に立地する。御勅使川扇状地の扇央～扇端部の北側に広が

る緩斜面上にあり、標高330mを測る。中部横断道及び甲西バイパス関連の発掘調査として平成9年度と10年度に約12,000m²の本調査が実施され、奈良～平安時代・鎌倉時代の住居跡、掘立柱建物跡、鎌倉～江戸時代の溝、戦国時代の土坑墓、井戸などが発見されている（第4図）。これらの遺構については、報告書の中でおおよその実年代が与えられている。調査区は既存の道路によって1区～3区に分けられている。このうち2区については、さらに2a区、2b区に分かれる。

奈良～平安時代の住居跡は13軒確認されている。すべての住居が8世紀末～9世紀初頭の中に収まる。3区に10軒、2b区に3軒あり、1区・2a区からは発見されなかった。また、同時期と見られる遺構として3区から掘立柱建物跡が2棟確認されている。住居跡、掘立柱建物跡ともに2b区の南西側から3区の北東側にかけて集中する傾向にある。

鎌倉時代の住居跡は4軒確認されている。出土土器から12世紀後半～13世紀前半に比定されている。4軒すべてが2a区から発見されており、このうち2～4号住居跡は後述する区画溝に一部切られている。これら4軒の住居跡は、2a区の中央からやや北寄りに集中して分布している。

石橋北屋敷遺跡でも区画溝が発見されているが、大塚遺跡と異なる点は、溝の覆土中から16世紀末頃の遺物がかかなりまとまって出土していることである。鎌倉時代の住居を切っており、16世紀末頃の土坑墓に切られていることから、石橋北屋敷遺跡における区画溝が機能していた時期は、14世紀～16世紀末の間に限定される。規模についても、最大幅2.5m、最大深75cmとやや大きい。2a区の西半分から2b区にかけてと3区の南西部で確認されている。また、3区からは東西に走る道路跡が発見されている。両側に側溝とも思われる溝が掘られており、この溝からの出土遺物および他の遺構との切り合い関係から14世紀～16世紀末とされる。

戦国時代に入ると2b区を中心として土坑墓が確認されるようになり、墓地としての様相を呈してくる。2a区で発見された井戸とともに時期は16世紀末である。また、当該期と思われる掘立柱建物跡が3区で2棟、1区で2棟発見されているが、断定はされていない。

4 御勅使川扇状地北部の集落展開

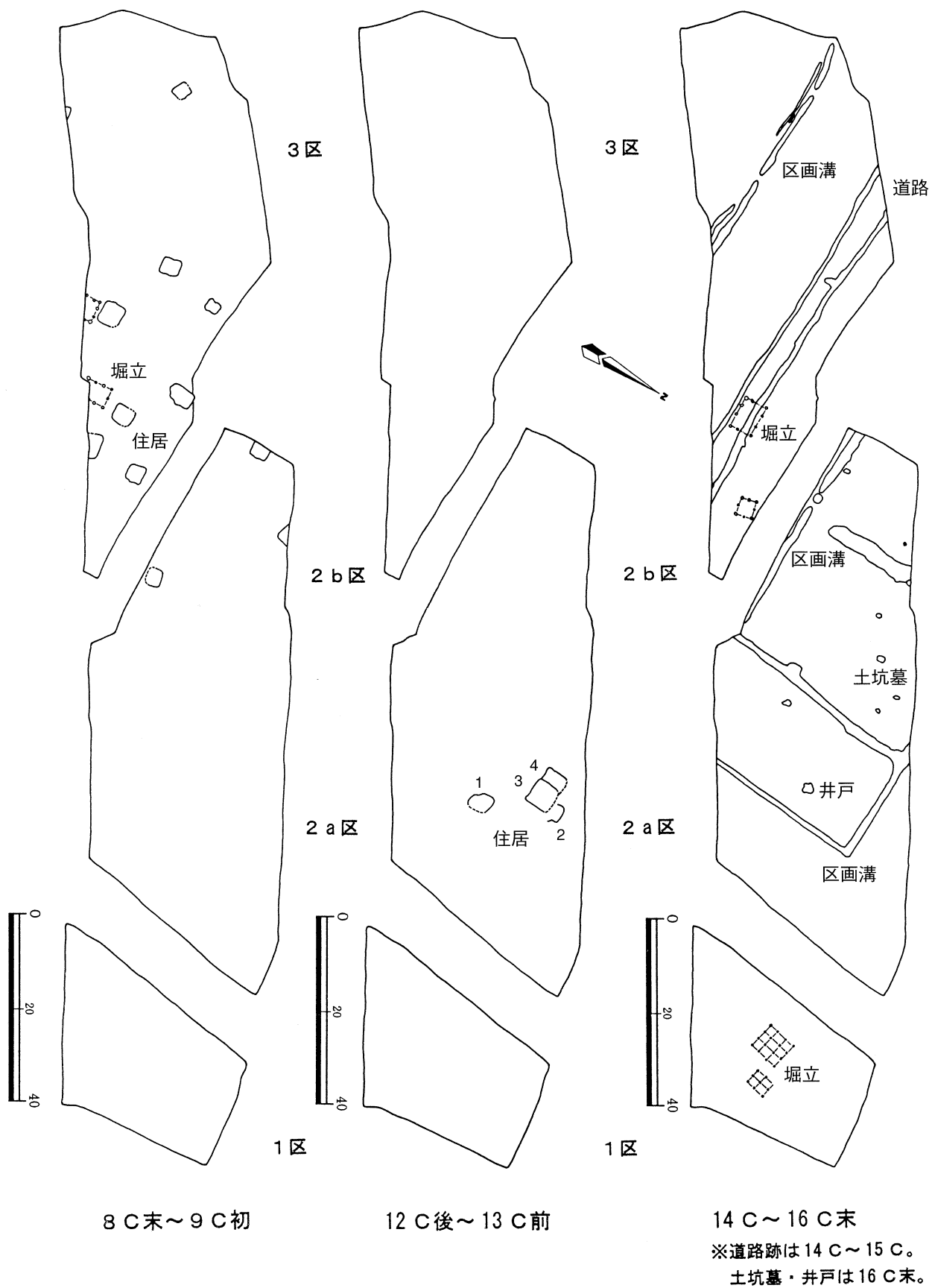
ここでは、先に述べた大塚遺跡、石橋北屋敷遺跡の状況を中心に、集落の動向を考えてみたい。

古墳時代前期の集落は、大塚遺跡の南北を谷に挟まれたA区の北東隅に分布する6軒に限定される。石橋北屋敷遺跡では当該期の住居は発見されていないことから、この住居群については、報告書の中で言及されているように11)、「时期的にも限られた小規模集落」であったと思われる。

奈良～平安時代には、両遺跡ともに住居数が増加する。大塚遺跡では9世紀前半を中心とした33軒が、石橋北屋敷遺跡では8世紀末～9世紀初頭を中心とした13軒がこれにあたる。遺跡間での集落展開をみると、8世紀末～9世紀初頭には石橋北屋敷遺跡の3区東側にまとまった一群が存在する。大塚遺跡でも当該期にあたる住居が確認されているが、軒数も少なく、特徴的な分布はみられない。石橋北屋敷遺跡の奈良～平安時代の集落がこの時期で終わるのに対して、大塚遺跡では9世紀前半になると集落としてのまとまりがみられるようになる。大塚遺跡では9世紀前半とみられる住居が13軒確認されている。遺跡中央の谷を囲むように分布しているが、B区に集中し、さらに南側へ広がる様相を呈している。いずれにしても、大塚遺跡でのこの次の段階にあたる9世紀中頃～後半の住居2軒をもって両遺跡での奈良～平安時代の集落は終末をむかえる。

鎌倉時代（12世紀後半～13世紀前半）の住居跡は、石橋北屋敷遺跡で4軒のみ確認されている。2a区の中央やや北寄りに集中しているが、同時性の面からみても3・4号住が重複しており、集落としての展開をとらえることは困難である。

鎌倉～戦国時代（14世紀～16世紀末）には、石橋北屋敷遺跡の2a区から3区にかけて、区画溝、道路跡といった、土地を区画する遺構が出現する。この区画の一部は現在まで踏襲されており、調査区外においても同様のことが言えると予想されることから、当該期にこの地域一帯の区画整理が行われた可能性を示唆するものと思われる。



第4図 石橋北屋敷遺跡の時期別遺構分布

さらに、16世紀末には、石橋北屋敷遺跡の2b区周辺が墓地として利用されるようになるが、土坑墓の中には、区画溝や道路に伴う溝を切っているものがみられることから、16世紀末以前に区画の変更があったことが考えられる。

5 おわりに

大塚遺跡、石橋北屋敷遺跡の状況からは、集落展開の画期を、古墳時代前期、奈良～平安時代の8世紀末～9世紀初頭、9世紀前半、鎌倉～戦国時代（14世紀～16世紀末）、戦国時代（16世紀末）にみてとれる。

古墳時代前期の集落に関しては、「时期的にも限られた小規模集落」であり、後の時代へつながるような状況はみられない。これに対して奈良～平安時代以降の集落の規模は比較的大きく、継続性が認められることから、画期間にある程度の連続性を考えることができる。

奈良～平安時代をみると、8世紀末～9世紀初頭に形成される石橋北屋敷遺跡の3区付近を中心とした集落は、9世紀前半になると大塚遺跡の南半分からさらに南側へとシフトする傾向がみられる。両遺跡間ではその後の動向をとらえることはできないが、9世紀前半～中頃の集落が確認された立石下遺跡¹²⁾や9世紀～10世紀の大集落である百々遺跡¹³⁾の存在を考慮すると、一連の集落の展開をさらに南側に求めることができようか。

鎌倉～戦国時代には、区画溝や道路跡といった、土地の区画整理の形跡がみられる。区画の一部が現在まで踏襲されていることから、現在の集落構成と非常に類似した集落が当該期に形成されていた可能性も窺える。このことは、墓地であった戦国時代においても、部分的な区画の変更にとどまり、大きな差異はないものと考ええる。八田村の集落の中心地が、明治期の大火事以前まで野牛島付近にあったとされることから¹⁴⁾、鎌倉～戦国時代についても同様のことが言えるのではないかと考えられる。

以上、非常に大まかではあるが、御勅使川扇状地北部における古代から中世にかけての集落展開について考えてみた。現時点での言及は時期尚早とも思われるが、今後の各種データの増加によってこの地域一帯の実態が明らかにされることを期待したい。

註

- 註1 野代恵子ほか2000「横堀遺跡」『年報』16 山梨県埋蔵文化財センター
- 註2 今福利恵ほか2000「百々遺跡②」『年報』16 山梨県埋蔵文化財センター
- 註3 横堀遺跡、百々遺跡ともに中部横断道および甲西バイパス関連の調査
- 註4 新津 健1997『大塚遺跡』山梨県教育委員会ほか
- 註5 小林健二2000『石橋北屋敷遺跡』山梨県教育委員会ほか
- 註6 保坂康夫ほか1999「壺番下堤跡」『年報』15 山梨県埋蔵文化財センター
- 註7 山本茂樹ほか2000「仲田遺跡」『年報』16 山梨県埋蔵文化財センター
- 註8 米田明訓ほか2000「立石下遺跡」『年報』16 山梨県埋蔵文化財センター
- 註9 註4におなじ
- 註10 註5におなじ
- 註11 註4におなじ
- 註12 註8におなじ
- 註13 註2におなじ
- 註14 八田村1972『八田村誌』八田村役場

当該期の集落の中心地が野牛島方面に想定されることは、報告書内（註5）でも指摘されている。